



Title	HUSCAPレター 第11号 : 拝見します。「初めての論文」: 第8回 吉田文和 大学院公共政策学連携研究部教授 / 大学院経済学研究科教授 「非鉄金属鋳業の資本蓄積と公害: 神岡鋳山公害をめぐる技術と経済. 1」
Issue Date	2008-12
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/88218">http://hdl.handle.net/2115/88218</a>
Type	periodical
File Information	hletter11.pdf



[Instructions for use](#)

北海道大学学術成果コレクション

# HUSCAP レター

学術成果コレクション (HUSCAP) は、北海道大学の研究者や大学院生などが著した学術論文、学会発表資料、教育資料などを電子ファイルで保存し、WEB で公開するものです。誰でも、無料で読むことができます。



## 拝見します。 初めての論文 (第8回)

吉田 文和

大学院公共政策学連携研究部教授  
大学院経済学研究科教授

### 「私の大学」となった鉱害調査

私の環境研究の出発点となった論文は、イタイイタイ病の発生源となった岐阜県の神岡鉱山の公害史研究である。その背景はこうである。日本の4大公害裁判の1つ、イタイイタイ病控訴審判決翌日(1972年8月10日)、被害者と三井金属鉱業本社との直接交渉において、公害防止協定書が結ばれた。その協定は、鉱山が住民と専門家の工場への立入り調査を認め、資料を提出し、調査費用の負担を負う画期的内容であった。以後30年以上にわたり住民の立入り調査が続けられ(次頁写真)、鉱山から排出されるカドミウムは15分の1に減少し、神通川の水質は自然状態に近づいている。

この神岡鉱山の発生源対策を行なうために科学者の支援を要請したことがきっかけで、京都大学工学部金属・資源系教室の関係者に依頼がいった。その関係で私のところにも、話が来たのである。経済学研究科は紛争状態のため研究室にも行けない状態だったので、私は工学研究科博士課程の畑明郎さん(大阪市大教授、現日本環境学会会長)と倉知三夫先生(京都大学名誉教授)の研究室に出入りすることになった。私が環境経済学を研究する出発点である。環境経済学という面では、植田和弘氏(京都大学教授、現環境経済・政策学会会長)も当時、倉知研究室の修士課程の院生で鉱山排水の原子吸光分析を行っていた。畑・吉田・植田

の3名がその後、環境経済や環境技術の方面で文理融合型の研究をする母体を提供して下さった倉知先生の慧眼には頭が下がる思いである。神岡鉱山に実際に入り、さらに神通川から船で採水できたことは環境経済学を勉強するうえでまたとない貴重な経験となった。また、当時法政大学の院生であった利根川治夫さんには共同研究で多くのことを教えられた。こうした研究は、神岡鉱山公害史研究として京都大学『経済論叢』に掲載され、それが私の就職論文となったのである。

## 古河講堂も鉱害の遺産

環境問題の発生原因、態様、環境政策は政治経済の在り方によって規定される。日本の資本主義の歴史において鉱業（石炭・金属）は初期の輸出産業として、また国内の素材エネルギー供給産業として大変重要な役割を果たした。しかし同時に基幹産業である農業に対して鉱毒水や大気汚染による鉱害問題を引き起こした。したがって公害はまず「鉱害」として知られるようになり、明治政府が解決を迫られた重要問題であった。古河財閥による足尾鉱毒事件は田中正造を指導者とする明治期最大の社会運動の1つを生み（北海道大学の古河講堂は足尾鉱毒事件を背景とした古河財閥の寄付）、住友財閥の別子銅山による煙害問題、日立鉱山の煙害問題、そして三井財閥の神岡鉱山の鉱毒問題は、いずれも日本の旧財閥（三井・三菱・住友・古河）や企業グループ（日立）のルーツがいかに鉱業に支えられていたかを示している。

古河鉱業は銅生産から銅線をつくり、さらにドイツのジーメンスと合弁で富士（古河のフとジーメンスのジからフジ）電機を生み、そこから電話をつくる富士通信機（富士通）が派生し、さらにコンピュータ会社が生まれ、ロボット会社を作ったという事実はまことに資本主義 100 年の変転そのものである。このように環境問題の発生は政治経済の発展と深い繋がりがある。

## ノーベル賞に値する無公害鉱業

神岡鉱山は自主的に毎年環境報告書を発行し、公害防止対策の維持・改善に努め、水系の監視と測定を行なっている。採鉱部門閉山後は坑道跡が一部カミオカンデ（宇宙線観測施設）となり、ノーベル物

理学賞受賞の研究舞台となった。鉛製錬工場は全国から自動車の廃バッテリーを集め、リサイクルする工場として生まれかわっている。



バッテリーのリサイクル工場

ふりかえって、環境・経済・技術のトライアングルをめぐる 30 年以上にわたる私の研究の1つの足場は「環境フィールド研究」であり、それを基礎とした理論的・歴史的分析である。その出発点を提供してくれた神岡鉱山と被害地の住民の皆さんの御協力には感謝の気持ちで一杯であり、毎年夏の神岡鉱山立入り調査に参加している。



毎年の住民による立ち入り調査

### 吉田文和先生の「初めての論文」

非鉄金属鉱業の資本蓄積と公害  
『経済論叢（京都大学経済学会）』第118巻第5/6号  
(1976年12月)；pp.25-54

この論文は、HUSCAP で読むことができます。